

10.9 植 物

10.9 植物

10.9.1 調査

1) 調査項目

- (1) 生育種及び植物相の特徴
- (2) 植生の状況
- (3) 保全すべき種及び保全すべき群落の状況

2) 調査方法

下記の方法により植物調査を行った。調査にあたっては、事前に事業計画地に隣接する大森調節池を主な活動拠点としている環境保全団体（埼玉県生態系保護協会入間支部）から大森調節池における動物や植生の確認状況等の情報を収集し、得られた情報を参考に調査を実施した。

なお、調査中に表 10.9-1 に示す保全すべき種及び外来種が確認された際は、確認地点を図面上に記録した。

表 10.9-1 保全すべき種及び外来種の選定基準

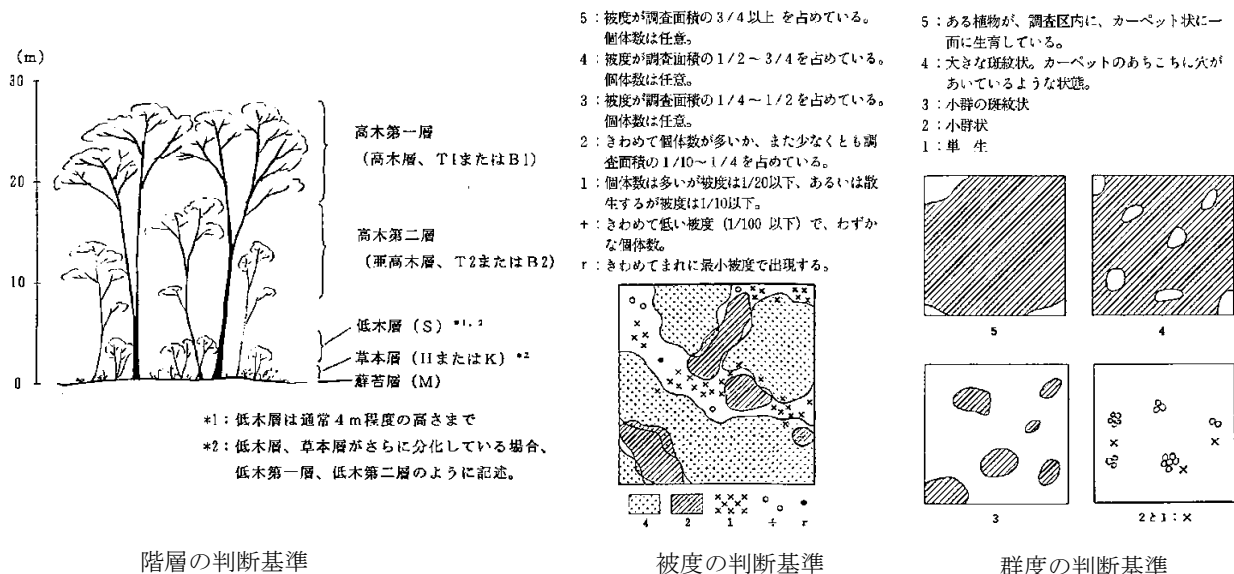
選定根拠			カテゴリー	
区分	略称	名称	記号	区分
保全すべき種 (保全種)	文化財保護法	「文化財保護法」(昭和 25 年 5 月法律第 214 号, 最終改正:平成 30 年 6 月 8 日法律第 42 号)	特	特別天然記念物指定種
			天	天然記念物指定種
	種の保存法	「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」(平成 4 年 6 月 法律第 75 号, 最終改正:令和元年 6 月 14 日法律第 37 号)	国内	国内希少野生動植物種
			国際	国際希少野生動植物種
			緊急	緊急指定種
	環境省 RL	「環境省レッドリスト 2020」(令和 2 年 3 月版) 維管束植物	EX	絶滅
			EW	野生絶滅
			CR+EN	絶滅危惧 I 類
			CR	絶滅危惧 IA 類
			EN	絶滅危惧 IB 類
			VU	絶滅危惧 II 類
			NT	準絶滅危惧
			DD	情報不足
			LP	絶滅のおそれのある地域個体群
			埼玉県 RDB	「埼玉県の希少野生生物 埼玉県レッドデータブック 2011 植物編」(平成 24 年 3 月 埼玉県)
	EW	野生絶滅		
	CR+EN	絶滅危惧 I 類		
	CR	絶滅危惧 IA 類		
	EN	絶滅危惧 IB 類		
	VU	絶滅危惧 II 類		
NT	準絶滅危惧			
DD	情報不足			
外来種	特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律(平成 16 年 6 月 法律第 78 号, 最終改正:平成 26 年 6 月 13 日法律第 69 号)	特定	特定外来生物	
		定着	定着を予防する外来種	
		総合	総合的に対策が必要な外来種 (i) 緊急対策外来種 (ii) 重点対策外来種 (iii) その他の総合対策外来種	
		産業	適切な管理が必要な産業上重要な外来種	
外来種	生態系リスト	「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」(2015 年 3 月 環境省)	定着	定着を予防する外来種
			総合	総合的に対策が必要な外来種 (i) 緊急対策外来種 (ii) 重点対策外来種 (iii) その他の総合対策外来種
外来種	生態系リスト	「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト」(2015 年 3 月 環境省)	産業	適切な管理が必要な産業上重要な外来種

(1) 生育種及び植物相の特徴

調査地域内を踏査し、生育する植物（維管束植物を対象とした）の出現種を記録した。なお、現地で同定が困難な種については同定の根拠となる部位（花、葉、種子など）を持ち帰り、後日同定し、合わせてリストを作成した。

(2) 植生の状況

航空写真判読により予め作成した下図を基に、調査地域内を踏査し、成立する植物群落について、その広がりや分布状況を平面図に記録し、現存植生図を作成した。また、各植物群落を代表する地点において、図 10.9-1 に示す植物社会学的手法により植生高、階層構造、種数、被度、群度、立地特性等を記録した。



出典：自然環境アセスメント技術マニュアル（1995年9月 自然環境アセスメント研究会 編）

図 10.9-1 階層及び被度・群度の判断基準

3) 調査地域・地点

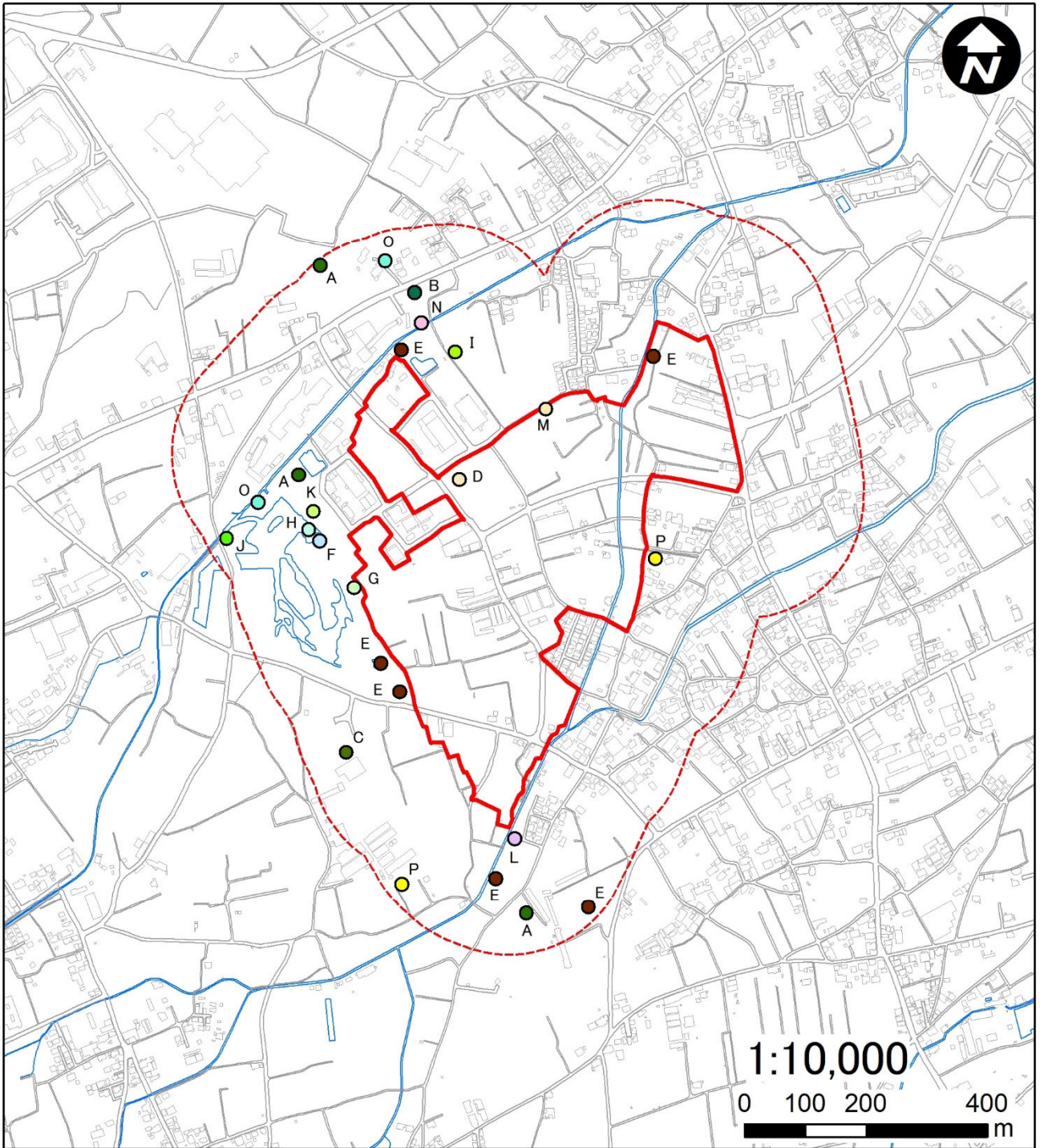
調査地域・地点を図 10.9-2 に示す。調査地域は、計画地及びその周辺において、植物に対する影響が想定される地域とし、動物の生息基盤となることも考慮して、計画地の周囲 200m を設定した。植生調査のコドラートは植生区分ごとに 1 箇所以上設定した。

4) 調査期間・頻度

調査期間・頻度を表 10.9-2 に示す。現地調査は既存資料を基に生育が想定される種の開花時期を考慮して実施した。また、植生及び保全すべき群落は、植物の生育が盛んで、かつ種の確認率が高い夏季に実施した。

表 10.9-2 調査期間・頻度

調査項目	調査期間・頻度	調査実施日
植物相	年3回	春季：令和元年5月23日、24日 夏季：令和元年6月17日、18日 8月1日、2日、26日、27日 秋季：令和元年9月1日、2日
植生	年1回	夏季：令和元年8月27日～8月28日、9月2日～3日



凡例

計画地

- | | | |
|---------------|--------------------------|----------------|
| ● A: コナラクヌギ群落 | ○ G: オギ群落 | ○ M: コセンダングサ群落 |
| ● B: アカメガシワ群落 | ○ H: ヨシ群落 | ○ N: アレチウリ群落 |
| ● C: ヤマガワ群落 | ● I: メシバ・エノコログサ群落 | ○ O: 二次草原 |
| ○ D: ケヤキ群落 | ● J: オオブタクサ群落 | ● P: タケ・ササ群落 |
| ● E: 植林・植栽群落 | ● K: クズ群落 | |
| ○ F: ヒメガマ群落 | ○ L: オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ群落 | |

図 10.9-2 調査地点位置図 (植物)

5) 調査結果

(1) 生育種及び植物相の特徴

ア. 植物相

現地調査の結果、104科433種（栽培品種等を含む）の植物が確認された。分類群ごとの確認状況は表 10.9-3 に、確認種の一覧は資料編に示す。確認種のうち逸出・帰化種は162種、在来種は271種であり、全体の約37%が帰化・逸出植物で占められていた。計画地内の確認種数は春季で184種、夏季で193種、秋季で117種であり、夏季に種数が最も多かった。

表 10.9-3 調査地内外の確認状況

分類群	通年 合計	調査時期													
		春季				夏季				秋季					
		内		外		内		外		内		外			
		科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数		
シダ植物	6	8	2	3	2	2	2	2	5	5	-	-	3	4	
種子植物	裸子植物	4	6	2	3	2	2	2	2	3	5	2	3	2	2
		4	8	2	2	3	6	2	4	4	8	-	-	3	4
	被子植物	16	107	10	36	10	31	9	44	15	80	7	22	13	46
		75	304	56	140	47	118	56	141	67	213	40	92	55	129
合計	104	433	72	184	64	159	71	193	94	311	49	117	76	186	

注) 分類は「河川水辺の国勢調査のための生物リスト～令和3年度版～」(令和3年公表, 水情報国土データ管理センター) に準じた。

イ. 植生の状況

現地調査の結果、表 10.9-4 に示す植物群落の確認された。各植物群落の概要を表 10.9-5 に、現存植生図を図 10.9-3 に示す。

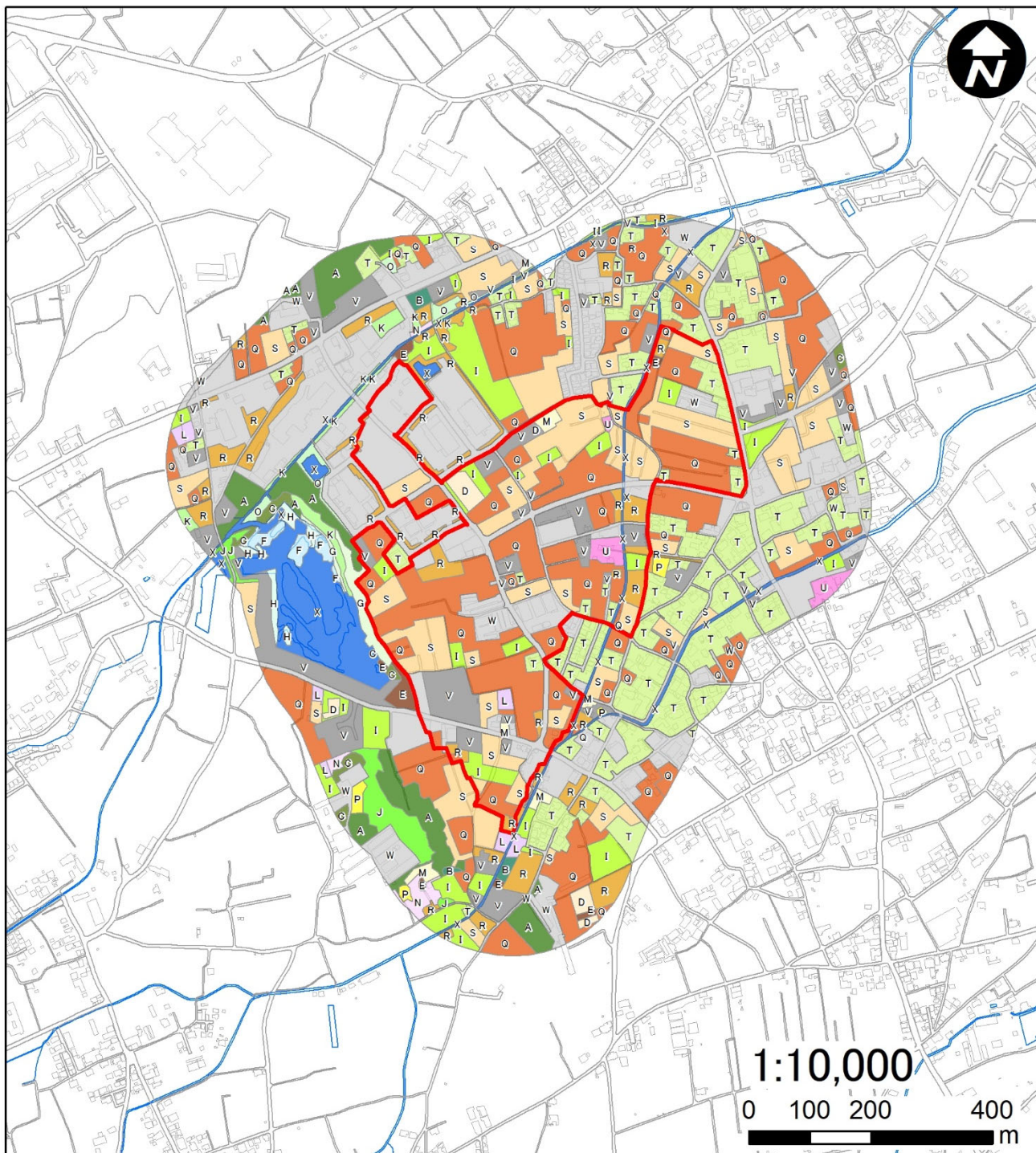
表 10.9-4 植物群落の区分及び面積

No.	群落 タイプ	群落	計画地		周辺		合計	
			面積(ha)	割合(%)	面積(ha)	割合(%)	面積(ha)	割合(%)
A	樹林地	クヌギ・コナラ群落	0.0	0.0	3.1	4.4	3.1	3.3
B		アカメガシワ群落	-	-	0.2	0.3	0.2	0.2
C		ヤマグワ群落	-	-	0.4	0.6	0.4	0.5
D		ケヤキ群落	0.2	1.0	0.2	0.3	0.5	0.5
E		植林・植栽群落	0.0	0.1	0.3	0.5	0.4	0.4
F	湿原・河川 ・池沼植生	ヒメガマ群落	-	-	0.4	0.5	0.4	0.4
G		オギ群落	0.0	0.0	0.4	0.6	0.4	0.5
H		ヨシ群落	-	-	0.3	0.5	0.3	0.3
I	草地	メヒシバ・エノコログサ群落	1.1	4.6	3.2	4.5	4.3	4.5
J		オオブタクサ群落	-	-	0.9	1.3	0.9	1.0
K		クズ群落	-	-	0.6	0.9	0.6	0.7
L		オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ群落	0.1	0.3	0.3	0.5	0.4	0.4
M		コセンダングサ群落	0.1	0.5	0.2	0.3	0.4	0.4
N		アレチウリ群落	-	-	0.3	0.5	0.3	0.4
O		二次草原	0.0	0.0	0.4	0.5	0.4	0.4
P	竹林	タケ・ササ群落	-	-	0.2	0.3	0.2	0.2
Q	耕作地	畑雑草群落	8.4	34.4	9.9	13.9	18.3	19.2
R		果樹園	1.0	4.1	3.5	4.9	4.5	4.7
S		茶畑	5.0	20.5	5.9	8.4	11.0	11.5
T	市街地等	緑の多い住宅地	0.8	3.1	11.7	16.5	12.4	13.0
U		神社・墓地	0.3	1.1	0.2	0.3	0.5	0.5
V		造成地	2.0	8.4	4.1	5.8	6.1	6.4
W		市街地	5.2	21.4	19.9	28.1	25.1	26.4
X	開放水域	開放水域	0.1	0.5	3.9	5.6	4.1	4.3
計			24.4	-	70.8	-	95.3	-

注) 四捨五入による端数処理の関係で、合計の値が一致しない場合がある。

表 10.9-5 確認群落及び植物群落の特性

No.	群落タイプ	群落名及び群落の概要	
A	樹林地	クヌギ・コナラ群落	・高木層は高さ 20m ほどに達し、コナラやクヌギなどが主な構成木であり、植被率は 85%程度であった。亜高木層はコナラやウワミズザクラ等で構成される。低木層は高さ 2.5～4m で、ヤマツツジ、ヤマコウバシ、カマツカ等が主な構成種である。草本層は高さ 1m 程度、アケビやテイカカズラ、アマチャヅルなどが確認された。
B		アカメガシワ群落	・高木層は高さ 14m、植被率は 80%でアカメガシワが優占するなかにウワミズザクラが混成した。亜高木層は成立していない。低木層は高さ 4m で、メダケが密生している。
C		ヤマグワ群落	・高木層は 6～7m、植被率は 75%以上でヤマグワが優占していた。低木層は高さ 2m、植被率は 40%でノイバラやヤマグワ、エノキ、ヤブガラシ、クズなどから構成される。草本層は高さ 1m 以下、植比率は 30～60%でカラスウリやヤブガラシ、クズなどが確認された。
D		ケヤキ群落	・高木層は高さ 20m、ケヤキ一種で構成されていた。亜高木層は高さ 12m、植被率は 20%で高木層と同じケヤキで構成される。低木層は高さ 4m、植被率は 5%であった。草本層はチャノキが優占していた。
E		植林・植栽群落	・エノキ・ムクノキ、スギ・ヒノキ、ヒマラヤスギ等で構成される群落。調査範囲内で小面積が点在して確認され、全体の 0.4%程度を占めていた。
F	湿原・河川 ・池沼植生	ヒメガマ群落	・群落高は 2.5m、植被率は 80%でヒメガマ 1 種が第一層で優占していた。下層にはヤナギタデが確認された。
G		オギ群落	・群落高は 1.8m、植被率は 100%でオギが一面を覆うなかにセイタカアワダチソウが生育するほか、クズやヤブガラシが確認された。
H		ヨシ群落	・群落高は 3m、植被率は 95%と高く、ヨシ 1 種で構成されていた。
I		草地	メヒシバ・エノコログサ群落
J		オオブタクサ群落	・上層部はオオブタクサが優占しており、下層はシロザやカラスウリ、ツユクサなどが確認された。
K		クズ群落	・群落高は 0.6m、植被率は 100%で、クズが一面を覆っていた。そのなかにヨモギやヤブガラシ、スギナ、ツユクサなどが確認された。
L		オオアレチノギク ・ヒメムカシヨモギ群落	・群落高は 2m、植被率は 60%で、上層はヒメムカシヨモギとオオアレチノギクで構成され、下層は 0.6m、植被率は 70%で、ユウゲショウとコセンダングサが優占するなかにツユクサ、ヒメムカシヨモギ、ハルジオンなどが確認された。
M		コセンダングサ群落	・群落高は 1.1m、植被率は 100%でコセンダングサが圧倒的に優占するなかに、メヒシバやアキノエノコログサ、エノコログサなどが混生する。
N		アレチウリ群落	・群落高は 0.5m、植被率は 100%でアレチウリが一面を覆うほかクズ、ヤブガラシなどが確認された。
O		二次草原	・カナムグラ、カラムシ、チガヤ等で構成される群落。事業計画地の周辺を中心に確認され、全体の 0.4%程度を占めていた。
P	竹林	タケ・ササ群落	・アズマネザサ、モウソウチク・マダケで構成される群落。事業計画地周辺のみで確認され、全体の 0.2%程度を占めていた。



凡例

 計画地			
 A:クヌギ・コナラ群落	 G:オギ群落	 M:コセンダングサ群落	 S:茶畑
 B:アカメガシワ群落	 H:ヨシ群落	 N:アレチウリ群落	 T:緑の多い住宅地
 C:ヤマグワ群落	 I:メヒシバ・エノコログサ群落	 O:二次草原	 U:神社・墓地
 D:ケヤキ群落	 J:オオバクサ群落	 P:タケ・ササ群落	 V:造成地
 E:植林・植栽群落	 K:クズ群落	 Q:畑雑草群落	 W:市街地
 F:ヒメガマ群落	 L:オオアレチノギク・ヒメムカシヨギ群落	 R:果樹園	 X:開放水域

図 10.9-3 現存植生図

(2) 保全すべき種及び保全すべき群落の状況

ア. 保全すべき種の確認状況

a. 植物相

表 10.9-6 に示す 3 科 4 種の保全すべき植物が確認された。

生態的特徴と確認状況を表 10.9-7 に、確認位置を図 10.9-4 に示す。

表 10.9-6 保全すべき植物一覧

No.	科	種	確認時期						文化財 保護法	種の 保存法	環境省 RL	埼玉県 RDB
			春季		夏季		秋季					
			内	外	内	外	内	外				
1	ドクダミ科	ハンゲショウ	-	○	○	○	-	○	-	-	-	VU
2	ラン科	シラン	-	-	-	-	○	-	-	-	NT	EN
3		ササバギンラン	-	-	-	○	-	-	-	-	-	NT
4	スイカズラ科	オミナエシ	-	-	○	○	-	-	-	-	-	EN
計	3 科	4 種	0 種	1 種	2 種	3 種	1 種	1 種	0 種	0 種	1 種	4 種

表 10.9-7 保全すべき植物の生態的特徴と確認状況

No.	種名	選定基準	生態的特徴	現地調査での確認状況
1	ハンゲショウ	【埼玉県RDB】：VU	【生態的特徴】 ・低地の水辺や湿地に群生する多年草。花期は6-8月。日本では、本州～琉球に分布する。 【県内での生息状況】 ・加須・中川低地と台地帯に広く分布し、平野の湿地に生育する。特に河川敷内の湿地では大群落を形成する。	【確認状況】 ・事業計画地内では見られず、東側周辺の宅地裏と店舗先の植栽地の2か所で確認された。本来の生育環境ではないことから、逸出個体と考えられた。
2	シラン	【環境省RL】：NT 【埼玉県RDB】：EN	【生態的特徴】 ・多年草。日当たりの良い湿り気のある斜面にはえる。4-5月やや大型の紅紫色花を3-7個つける。日本では、本州中南部～琉球に分布する。 【県内での生息状況】 ・低地～低山帯に分布し、山地の日当たりの良い斜面や川原の岩上に生育する。	【確認状況】 ・事業計画地内2か所で確認された。生育場所が、茶畑と畑地であり、本来の生育環境ではないことから、逸出個体と考えられた。
3	ササバギンラン	【埼玉県RDB】：NT	【生態的特徴】 ・多年草。山地樹林下にはえる。花序は有毛、5-6月、白色の数花をまばらにつける。日本では、北海道～九州に分布する。 【県内での生息状況】 ・台地・丘陵帯～山地に広く分布し、落城樹林の林床に生育する。	【確認状況】 ・ XXXXXXXXXX クヌギ・コナラ林内の1か所で確認された。
4	オミナエシ	【埼玉県RDB】：EN	【生態的特徴】 ・日当たりの良い草地や管理された里山に生育する。低山帯の採草地や台地の里山など人の管理がなくなり自然遷移が進行したため、急激に生育環境が減っていると考えられる。 【県内での生息状況】 ・低地帯～山地帯にまで広く分布する	【確認状況】 ・事業計画地内と北東側周辺部の2か所で確認された。生育場所が畑地内であり、本来の生育環境ではないことから、逸出個体と考えられた。

注) 生態的特徴は「埼玉県レッドデータブック 2011 植物編」(平成 24 年 3 月 埼玉県)、「日本の野生植物 木本 I、草本 I 単子葉類、草本 II 離弁花類 (昭和 57 年 株式会社平凡社) を参考に記載した。

イ. 保全すべき群落の状況

本調査で保全すべき群落は確認されなかった。

希少動植物保護の観点から
一部資料を非公開とする

10.9.2 予測

1) 工事（造成等の工事）による影響及び存在・供用（造成地の存在）による影響

(1) 予測項目

予測項目は、工事（造成等の工事）及び存在・供用（造成地の存在）による植物相、植生及び保全すべき種への直接的・間接的影響とする。本事業における直接的・間接的影響要因は表 10.9-8 に示すとおりである。

なお、現地調査において保全すべき群落は確認されなかったことから、影響については予測を行わないこととする。

表 10.9-8 植物への直接的・間接的影響要因

区分	影響要因	
工事（造成等の工事）	直接的影響	・造成等の工事による生育環境の消失 ・樹木の伐採
存在（造成地の存在）	直接的影響	・造成地の存在による生育環境の消失
	間接的影響	・造成地の存在による生育環境の質的变化（光環境の変化等）

(2) 予測地域

予測地域は、植物相及び植生に対する影響が想定される地域とし、調査地域と同様に、計画地及び周辺 200m の範囲とした。予測地点は、植物相、植生については予測地域全域とし、保全すべき種については、その生育地及び分布地とした。

(3) 予測対象時期

工事中は工事計画を考慮し、植物相、植生及び保全すべき種への影響が最大となる時期として、土地改変が最大となる時期となる時期とした。

存在による影響は、工事が完了し、植物の生育環境が安定した時期とした。

(4) 予測方法

ア. 予測手順

予測手順を図 10.9-5 に示す。また、本事業による影響を下記の方法で予測した。

a. 直接的影響

工事に伴う土地の形状変更についての対象事業計画を、植物相、植生及び保全すべき種の生育環境の調査結果と重ね合わせるにより、改変量を把握した上で予測した。

b. 間接的影響

造成地の存在による生育環境の質的变化については、関連項目の予測結果及び事例の引用により予測した。

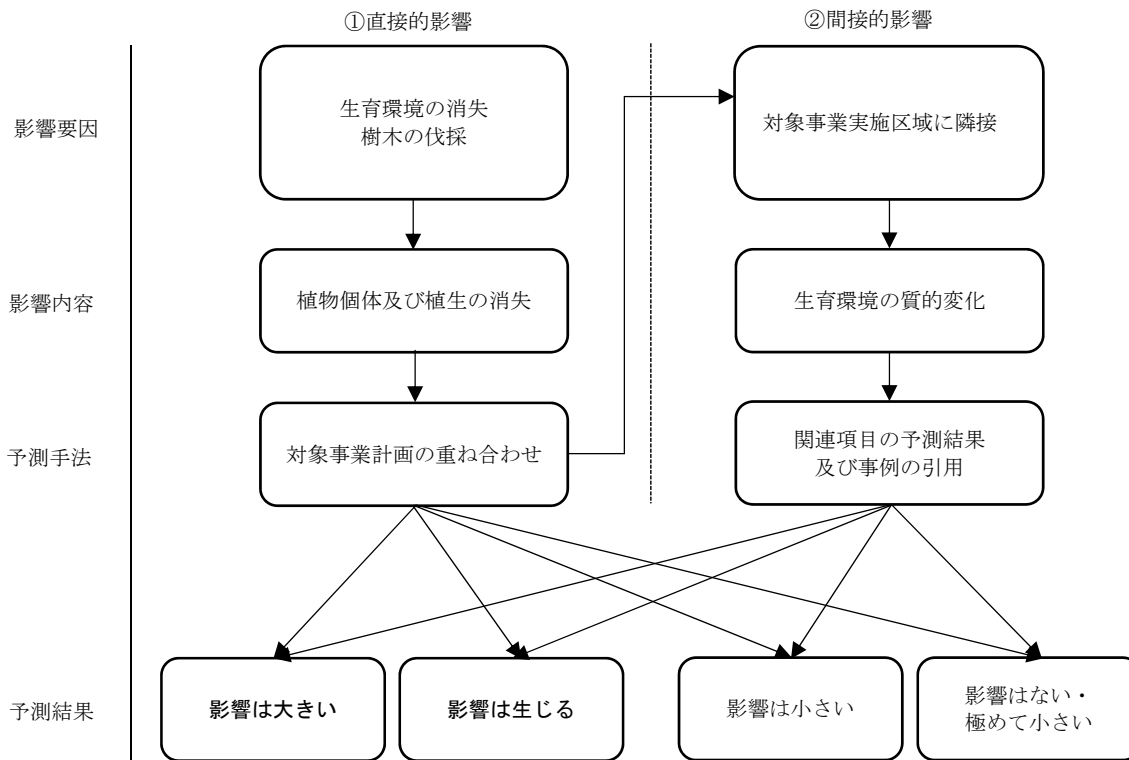


図 10.9-5 植物に係る予測方法のフロー

(5) 予測条件

本事業は、神社区域及び河川区域を除き全域を改変する計画であり、林神社と稲荷神社については、現況保存を前提として取り扱う。

また、計画地内東部の谷川沿いに3か所の街区公園を整備するとともに、所沢市公共施設緑化ガイドライン等を踏まえて周辺環境との調和や騒音・振動等による環境悪化をもたらさないよう、地区の境界や用途の境界に緩衝帯（緩衝緑地）を設置する。なお、産業地の外周に高木植栽空間（高木植栽帯）を配置する。

(6) 予測結果

ア. 植物相への影響

工事（造成等の工事）及び存在・供用（造成地の存在）による植物相への影響の予測結果を表 10.9-9 に示す。

表 10.9-9 植物相への影響予測

確認状況								内のみの確認種（在来種）
内のみ		内		外		合計		
科数	種数	科数	種数	科数	種数	科数	種数	
40 科	60 種	87 科	286 種	97 科	373 種	104 科	433 種	オモト, ヤワラスゲ, スズメノチャヒキ, アシボソ, ミヅイチゴツナギ, オオイチゴツナギ, ユキノシタ, クワクサ, エドヒガン, ナワシロイチゴ, エゾタチカタバミ, コミカンソウ, イロハモミジ, イヌガラシ, ミチヤナギ, ツメクサ, サカキ, コナスビ, フタバムグラ, イヌホオズキ, キュウリグサ, ムシクサ, ホタルブクロ, オオジシバリ, キヅタ, オヤブジラミ
<p>【直接的影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象事業実施区域内において確認された植物は 286 種であり、全確認種のうち約 66%であったが、これら確認種は対象事業実施区域外でも多く確認された種であった。対象事業実施区域内のみで確認された種は 60 種であり全確認種の約 14%となり、さらに野生・在来種のみ場合 26 種と全確認種の約 6%とわずかであった。また、確認された野生・在来種の生育基盤は周辺に広く分布することから工事に伴う土地形状変更及び樹木の伐採による、直接的影響は小さいと予測される。 <p>【間接的影響】</p> <ul style="list-style-type: none"> 対象事業実施区域周辺に特有の生育環境を要する植物種は確認されておらず、その生育基盤も予測地域内に広く分布する群落により構成されていることから、工事に伴う土地形状変更及び樹木の伐採による、間接的影響は極めて小さいと予測される。 								

イ. 植生への影響

対象事業実施区域内において確認された植生の一部が消滅するものの、予測地域全体としての減少率は低く、改変範囲のほとんどは耕作地や市街地及び外来・逸出で構成される種の群落であり現況と工事完了後の自然度の高い植物群落の占有率にもほとんど変化が生じないことから、直接的影響は小さいと予測される。

また、対象事業実施区域に隣接する植生についても直接的影響と同様に、予測地域全体としての変化率は低いと考えられ、間接的影響は小さいと予測される。

表 10.9-10 植生への影響予測

No.	群落タイプ	群落	現況		工事完了後		減少面積 (ha)	減少率 (%)
			面積 (ha)	割合 (%)	面積 (ha)	割合 (%)		
A	樹林地	クヌギ・コナラ群落	3.1	3.3	3.1	4.3%	0.0	0.2%
B		アカメガシワ群落	0.2	0.2	0.2	0.3%	-	-
C		ヤマグル群落	0.4	0.5	0.4	0.6%	-	-
D		ケヤキ群落	0.5	0.5	0.2	0.3%	0.2	50.3%
E		植林・植栽群落	0.4	0.4	0.4	0.5%	0.0	8.7%
F	湿原・河川・池沼植生	ヒメガマ群落	0.4	0.4	0.4	0.5%	-	-
G		オギ群落	0.4	0.5	0.4	0.6%	0.0	0.5%
H		ヨシ群落	0.3	0.3	0.3	0.5%	-	-
I	草地	メヒシバ・エノコログサ群落	4.3	4.5	3.2	4.5%	1.1	25.6%
J		オオブタクサ群落	0.9	1.0	0.9	1.3%	-	-
K		クズ群落	0.6	0.7	0.6	0.9%	-	-
L		オオアレチノギク・ヒメムカシヨモギ	0.4	0.4	0.3	0.5%	0.1	19.7%
M		コセンダングサ群落	0.4	0.4	0.2	0.3%	0.1	36.0%
N		アレチウリ群落	0.3	0.4	0.3	0.5%	-	-
O		二次草原	0.4	0.4	0.4	0.5%	0.0	0.2%
P		竹林	タケ・ササ群落	0.2	0.2	0.2	0.3%	-
Q	耕作地	畑雑草群落	18.3	19.2	9.9	13.9%	8.4	45.8%
R		果樹園	4.5	4.7	3.5	5.0%	0.9	20.8%
S		茶畑	11.0	11.5	6.0	8.4%	4.9	45.0%
T	市街地等	緑の多い住宅地	12.4	13.0	11.7	16.3%	0.7	6.0%
U		神社・墓地	0.5	0.5	0.4	0.6%	0.0	4.1%
V		造成地	6.1	6.4	4.1	5.7%	2.0	33.3%
W		市街地	25.1	26.4	20.0	27.9%	5.1	20.5%
X	開放水域	開放水域	4.1	4.3	4.1	5.7%	-	-
計			95.3	-	71.5	-	23.8	25.0%

注) 四捨五入による端数処理の関係で、合計の値が一致しない場合がある。

ウ. 保全すべき種への影響

工事（造成等の工事）及び存在・供用（造成地の存在）による植物相への影響の予測結果を表 10.9-11 に示す。なお、調査で確認されたハンゲショウ、シラン、オミナエシの 3 種は保全すべき種に該当するものの、現地での確認状況から逸出個体と考えられたため、影響については予測を行わないこととする。

表 10.9-11 保全すべき種への影響予測

種和名	確認状況	予測結果	
		直接的影響	間接的影響
ササバギンラン	・ [] のクヌギ・コナラ林内の 1 か所で確認された。	・ 事業実施区域内で確認されていないことから、直接的影響はないと予測される。	・ 事業実施区域近辺で確認されていないことから、間接的影響はないと予測される。

10.9.3 評価

1) 工事（造成等の工事）による影響及び存在・供用（造成地の存在）による影響

(1) 評価方法

ア. 回避・低減に係る評価

環境保全措置の検討結果を踏まえ、保全すべき種等について、それらを保全するために適切な措置を講じ、影響が、実行可能な範囲内での回避・低減が図られるか否かを評価基準とする。

イ. 基準や目標との整合性に係る評価

以下の事項を目標として、整合性が図られているかを判断する。

- ・環境省レッドリストの記載種の保全
- ・埼玉県の希少野生生物 埼玉県レッドデータブック 2011 植物編の記載種の保全

(2) 評価の結果

ア. 回避・低減に係る評価

工事（造成等の工事）及び存在・供用（造成地の存在）に伴う植物への影響については、表 10.9-12 に示した環境保全措置を講じることで、植物への影響の回避・低減に努める。

改変地の多くは耕作地及び市街地のため、動植物の生育基盤となる自然度の高い植生の改変は少ない。また、確認された保全すべき種についても、逸出もしくは生育箇所が改変区域外であるため特別な配慮を必要としないと考えられることから、事業による影響は小さいと評価する。

なお、減少する樹林地に対しては公園の植栽に樹木を用いるほか、進出企業と調整し、新たな樹林地を確保することで、事業により実施可能な範囲で影響の低減が図られると評価する。

表 10.9-12 工事（造成等の工事）による影響及び存在・供用（造成地の存在）による影響に対する環境保全措置

保全措置の種類	低減	低減	低減	代償
実施主体	事業者	事業者	事業者	事業者
実施内容	工事中の大気・水質に係る環境保全措置を確実に実施する。	植生への影響を抑えるため、改変域を最小限にとどめとともに、周辺区域への踏み荒らしがないよう注意を払う。	土砂の搬入・搬出や車両の移動は最小限にとどめ移動により外来種が拡散しないように配慮する。	進出企業に対して緑化を図るよう要請し、生物の新たな生息空間や移動路となる緑被地を創出する。
実施時期	工事中	工事計画立案時，工事中	工事計画立案時，工事中	事業計画立案時
効果	計画地及び周辺地域の植物種の生育に対する影響を軽減できる。	植生が保全されることで、動物の生息環境が保全できる。	外来種を拡散させないことで在来種が保全できる。	動植物の新たな生息空間の創出が期待される。
効果の不確実性	なし	なし	なし	なし
他の環境への影響	なし	なし	なし	なし

イ. 基準や目標との整合性に係る評価

本調査で確認された保全すべき種のうち、ハンゲショウ、シラン、オミナエシの3種は現地の確認状況から逸出個体と考えられ、ササバギンランについては生育箇所が改変区域外であるため特別な配慮を必要としないと考えられる。

また、減少する植生に対しては、公園の植栽に樹木を用いるほか、進出企業と調整し、新たな樹林地を確保することで事業対象区域の植生回復に寄与すると考えられる。

以上のことから、基準や目標との整合性が図られていると評価する。